慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	批判的内省：心理學的方法についての一考察
Sub Title	
Author	城戸, 幡太郎(Kido, Mantaro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1928
Jtitle	哲學 No.4 (1928. 8) ,p.215- 233
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000004-0215

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批判的內省

——心理學的方法についての一考察——

城戸幡太郎

一

內省的方法による心理學は能力心理學や聯想心理學に於て用ゐられた時代後れの心理學的方法のやうに見なされるかも知れぬ。ヴントは斯る方法による心理學をReflexionspsychologieとして排斥してゐるけれども、彼が云つてゐるやうに意識過程を表象の結合として說明する心理學を直ちに內省による或は反省による心理學とは云へないと思ふ。何となればヴントの實驗心理學は實驗的方法によるといつても、心理學的觀察の方法は純然たる客觀的方法によるのではなく、實驗的條件によつて制約された主觀の意識過程を觀察するのであるから、斯る觀察はやはり經驗者自身の自己觀察である。自己觀察といふ意味なしには如何にして

直接經驗が間接經驗から區別され得るであらうか。心理學が直接經驗の學である限り、自己觀察といふことなしには心理學的經驗は成立しないであらう。しかし自己觀察といふことは少くとも現今の實驗心理學に於ては二重の意味に用ゐられてゐると思ふ。一つは心理學者自身が實驗的條件の下に自分の意識過程を觀察すること、他は實驗的條件の下に觀察された他人の意識過程である。觀察することゝ觀察されたものを更に觀察することゝは全く別な働きであるにも拘はらず、從來の實驗心理學者は何の反省もなく兩者を混同し或は同時に行ひ、加之斯くすることによつて實驗的結果の客觀的妥當性を得らるゝものと信じてゐた。ティチナーの如きは斯る考から更に觀察の純粹性を得るために內省をなすものは內省に熟練した心理學者であることを要求してゐるが、しかし斯る要求は果して何を意味するものであらうか。實驗的內省に對するティチナーの要求は、ヴントによつて要求された個人心理學としての實驗的方法による意識現象に關する一般的法則の發見といふ經驗心理學的二律反背を解くための窮策であつたとも考へられる。遺傳や環境を異にする個人の意識的經驗は箇別的なものであつて決して一般的な

ものとは考へられぬ。斯る箇別的特殊性から如何にして一般的共通性を導き出すことができるのであらうか。彼等はできるだけ多くの個人を觀察して彼等に共通なる性質のみを抽象することによつて意識現象の一般的法則が發見されると云ふであらう。茲に於て實驗心理學は同時に統計心理學でなければならなくなる。子供や狂人の意識現象を如何に多く實驗的に統計しても意識の一般的法則なるものが發見せられるであらうか。如何に多くの材料を蒐集することができても子供の心は依然として子供の心であつて大人の心ではなく、狂人の心は常人の心とは違つてゐるといふ事實が判明するだけのことである。子供や狂人の心を觀察するに何うして自己觀察といふやうな方法が役に立つであらうか。況や動物の心などを觀察するに內省といふやうな方法は問題にするだけ野暮な話ではなからうか。實驗心理學は結局行動心理學のやうな純粹な客觀的方法による學問にならなければならぬであらうといふやうな疑問は當然起り得ることゝ思ふ。しかし斯る方法によつて發見される心の法則は決して一般的法則ではなく心の發達及び趣異に於ける特殊な法則に過ぎず、一般的法則を發見するにはや

はり吾々の意識的經驗に基いて觀察せねばならぬとすれば、吾々とは何を意味するのであらうか。茲にティチナーの如く心理學者といふ人間を持ち出してくるならば、如何にして心理學者は心理學者ならざる人間と區別されねばならぬかゞ問題とならねばならぬ。同じく自己觀察といつても心理學者の自己觀察と心理學者ならざる者の自己觀察とは違はねばならぬ。茲に觀察といふことに對する心理學の問題がある。

二

自分は斯る意味で自己觀察に於ける內省と內觀とを區別したいと思ふ。既にブレンターノは心理學的觀察に於ける內部知覺と內觀との區別を明瞭に示してゐる。自分は彼の考に從つて內省を彼の所謂內部知覺と同じ意味に用ゐる。內省に於ては經驗する者と經驗される者、或は意識する者と意識される者とは同時であつて決して其の間に時間的關係を認めることはできぬ。意識する作用と意識される對象とが同時的存在である限りに於て斯る存在は心的存在であるとい

ふことができる。故に內省とは經驗に於ける心的存在の確立である。即ち內省は吾々の經驗に於て心的なる存在を可能ならしめる方法である。しかし心的存在は吾々の經驗に於ける唯一の存在でもなければ、又經驗の全體でもない、たゞ內省といふ方法によつて構成された一つの存在に過ぎぬ。吾々は內省によつて經驗を心的存在として對象と作用との同時的存在を確立せんとする一面に於て對象は作用と分離して働くものと働かれるものとの時間的對立即ち因果關係を成立せしむるやうになる。斯く對象が働かれるものとして働くものから獨立に考へられる場合には對象は吾々に對して物的存在として經驗される。しかし經驗が同時的と繼起的とに區別されることが時間的に規定されない限り、心的存在と物的存在とは吾々の經驗に於て互に何らの因果關係をも亦規定關係をも持合ふものではない。若し吾々の經驗に於て分離した對象と作用とが互に因果關係によつて働きかけられ働きかけるものとして存在する場合には、兩者は心的存在と物的存在との關係として存在するのではなく、働きかけられるものは自然として、働きかけるものは人間として存在するのである。吾々の經驗に於て自然と人間

との相互關係が全體として絶えず發展する形態を表現する時、斯る形態を歴史とも文化とも稱することができるものである。

吾々が吾々の意識過程を觀察する時、意識的經驗が時間的に分裂して觀察するものと觀察されるものに對立する場合には、自己は既に一つの自己ではなく時間的には少くとも現在の自己と過去の自己とに分裂されてゐるのである。現在の自己に對して過去の自己が觀察される限り、二つの自己は決して同時的存在ではない。從つて現在の自己が過去の自己を内省するといふやうなことは不可能なことである。しかし過去の自己を追想してゐる現在の自己意識、即ち過去の自己が現在の自己意識の内容となつて經驗されてゐる追想作用は明かに心的存在として内省されねばならぬ。追想作用の内容となつてゐる自己が追想の對象として時間的に分裂して存在すると考へられる限り、追想される過去の自己は心的存在ではなくて、寧ろ物的存在であると云はねばならぬ。しかし過去の自己は現在の自己によつて追想されてゐる限り、兩者の間には既に何らかの意味で相互關係が認められねばならぬ。殊に過去の自己が單なる記憶心像として追想されてゐ

る場合には現在の自己と過去の自己との相互關係は之を自然と人間との相互關係としては存立しない特殊な形態を成立せしめる。斯る形態を歴史とも文化とも稱することはできぬ。自分は斯る形態を自我或は自己意識として單なる意識形態としての心的存在から區別したいと思ふ。而して吾々が吾々自身の意識について語つてゐるものは決して單なる内省による心的存在としての意識形態ではなくて、自己が自己について觀察された即ち内觀された一つの對象としての自我形態である。自我形態は追想作用の内容としては内省されるが、其について物語ることはできぬ。内省には言葉は不必要である。言葉を介して何物かを物語ることは内省することではない。言葉其者も内省によらなければ心的存在としては經驗されないのである。從來の實驗心理學に於て常に用ゐられる「内省の報告」とは内省其者ではなくて、内省が言葉を介して表現された物語に過ぎない。しかし内省が言葉を介して表現される限り、表現されてゐる物語の内容は最早内省ではない。内省は決して其まゝの姿では表現されない。ステルンの如き心理學者が内省の不可能を主張するのは「内省の報告」を以つて直ちに内省其者と考へて

ゐる心理學者達に對しては尤な主張であるが、是によつて直ちに內省の可能を否定してしまうわけにはゆかぬ。報告された內省は既に物語の內容となつた事柄であつて、全く別の作用によつて置換へられた事實である。例へば「音についての內省報告」といふことは「音を聽く」ことではなく、「聽かれた音について話す」ことである。話された音は言語の內容としての音の意味であつて聽覺の內容としての音の知覺ではない。心理學が飽くまで吾々の經驗に於ける直接的なるものを問題として研究せねばならぬとすれば、音の直接經驗を間接的に表現された音から如何にして研究すべきかゞ問題である。

音の知覺を經驗するに心理學者が他人の內省報告に基いて考察してゐる限り、心理學者の直接經驗する所の者は物語られた音の意味であつて、其の音の知覺は間接に經驗されてゐるに過ぎない、斯る間接經驗としての音の知覺がやはり直接經驗としての音の知覺であるかの如く考へられるのは、他人の內省を直ちに自分の內省に置換へて考へてゐるからである。兩者の內省を勝手に置換へて考へることができるためには、心理學的方法には一つの大きな假定を許してかゝらねば

ならぬ、即ち同一條件の下に經驗される異る人間の內省は共通でなければならぬといふことである。人間的經驗に於ける內省の共通性を認めることによつて誰でもが自分自身で內省した經驗は誰の內省にも妥當するといふ內省の普遍性を認めなければならなくなる。若し斯る內省による經驗の普遍妥當性が認められるとすれば、最も直接に經驗することのできる自分自身の經驗を確實に內省さへすることができれば、敢て他人の內省の多くを聽く必要はないわけである　其にも拘らず多くの人々の內省報告に基いて心的存在の一般的法則を發見しやうとするが如きは矛盾した方法であると云はねばならぬ。實驗心理學者が常に行ふ個人的結果の統計的平均は決して內省其者の平均ではなく、同じ內省的結果を生ぜしめた刺激的條件の平均に過ぎない。音の變化を辨別せしむる刺激的條件が人により又は時によつて相違するとしても辨別作用としての內省には何の變りもないのである。吾々が內省によつて經驗せんとするものは心的存在の種々なる現れ方であつて、吾々は內省によつて始めて吾々の意識作用を系統的に分類することができるのである。苟も存在するものには全て存在すべき充分の理由が

なければならぬ。一度吾々の意識に現れた心的存在の事實が內省によつて證明されたならば、斯る存在の事實はたとひ其が特殊な條件によつて現はれたものとしても、其は現はれねばならなかつた充分の理由を認めねばならぬ。全て意識することのできるものは內省することのできるものである。しかし內省による心的存在の事實が如何なる關係によつて現はれるかは單に內省するといふだけでは認識されない事實である。一つの意識作用は同時に他の意識作用と互に聯關して現はれるものであるが、斯く聯關して現はれる箇々の意識作用を全體としての統一的關係に秩序づけて考へるといふことは單に箇々の意識作用を把捉する內省によつてはなし得ない働きである。茲に內省には箇々の心的存在を意識する働きと同時に其が全體として互に聯關する關係を意識する働きを認めねばならなくなる。ブレンターノの言葉をかりて云へば、關係せしむる意識は表象作用に於けるModus rectusであり、關係せしめらるゝものゝ意識はModus obliquusである。しかし此等二の樣相は表象作用或は意識作用の性質によつて現はれ方を異にするものである。例へば音を聽いてゐる場合には音が意識作用に於けるModus rec-

tusであるが、音について物語つてゐる場合には音は之に反してModus obliquusであると考へられる。斯る見方から内省による心理學的方法を考へて見ると、心理學者としての内省は常に箇々の心的存在を或る關係に於て認識せんとするものであるから、彼の内省は恒に關係の意識をModus rectusとして、關係せしめられるものについて、記述することを目的とせねばならぬ。しかし關係は關係せしめられるものなしには存立しないのであるから關係の意識をModus rectusとする場合には關係せしめられるものは同時にModus obliquusとして存立してゐねばならぬ。故に心理學的記述は心的存在の關係であつて箇々の心的存在其者は種々なる關係の言葉によつてのみ表現され得るものである。而して關係の言葉は主語と述語とから成立する。所謂「形態」の如きものが知覺されたとしても、其が一つの主語として表はされ得る限り、形態知覺其者は決して關係の意識ではない。古來多くの人々によつて說かれてゐるやうに主語の内には述語が含蓄されてゐ、述語の内には主語が包攝されてゐるやうに、關係と關係せしめられてゐるものとは互に切り離すことのできぬ一つの表現として統一されてゐるものである。内省の事實が

一つの言葉として表現される場合には恒に其の主語となるものはModus obliquusとして心的存在の符號に過ぎない。しかし單なる符號としての主語の意味は述語に包攝されて理解される限り、述語をModus rectusとして意識し得るものにとつては同時に述語的意味の内に主語の本質を意識することができるのである。しかし述語する表現の形式は人によつて必ずしも同一ではない。同じ事柄に關して述語する表現の形式が違へば、述語によつて理解する限り、事柄其者も違つて理解される。茲に同じ心理學に於ても能力心理學、聯想心理學、統覺心理學、形態心理學など色々な心理學說が生ずるのである。此等の心理學はいづれも同じ心的存在について述語する方法を異にしてゐるに過ぎぬ。然らば心理學としては同じ心的存在に關して如何に述語するのが正しのであるか。茲にカントの云つたやうに學問的批判の問題はquid factiからquid jurisへ轉向せねばならなくなるのである。しかし學問の權利は事實に關してのみ價値が認められるのであるから、經驗に基いて事實を證明することができなければ學問的權利には何の價値もないことになる。

三

吾々が述語し得る心的存在は、たとひ其が如何なる特殊な存在の仕方をしてゐても、其が存在する以上存在すべき充分の理由がなければならぬ。吾々が心的存在について其は如何にして存在し得るやうになつたかを反省する場合には、内省を可能ならしむる對象の客觀性を考へることになる、即ち經驗に於て對象と作用とが對立するやうになる。對象から刺激されることによつて意識は發現すると考へるならば、吾々の經驗に於ては明かに意識するものと意識せしむるもの或は意識されるものとの對立が認められるやうになる。茲に吾々の心的存在に對して物的存在としての刺激的條件が考へられるやうになる。斯る刺激的條件は、意識内容とは獨立に考へられる限り、いづれの内省的主體からも獨立に而も彼等に對しては恒に共通な條件として認められる(何故に刺激的條件が一般的共通な條件として考へられるかは別に批判を要する問題であるが、此は對象論の問題として此論文に於ては暫く預つて置きたい)。斯る刺激概念の恒常假定によつて心的

存在の現れ方を客觀的に規定して考へる。而して此の刺激概念が記述に於ける主語の意味を規定する重要な役目を演ずるのであるが、ヴント始めグラーツ學派の學者達が誤つたやうに、斯る刺激概念を同時に意識內容の要素概念と混同してはならぬ。刺激的條件は內省的主體を制約する共通な客觀的條件であつて、此の條件が一定してゐなければ內省による記述を比較することができぬ。又此の條件が一定の目的によつて任意に變化されなければ內省による記述を實驗することができぬ。內省による心的存在の記述に相違がある場合には先づ刺激的條件を一定にし、實驗的に內省を制約して觀察してみねばならぬ。內省が少くとも記述の正否を問題として行はれる場合には、內省は單なる放任的內省ではなく、實驗的內省でなくてはならぬ。斯く既に內省が實驗的條件によつて行はれるといふことは、內省が批判的に行はれてゐるといふことを意味するものでなくてはならぬ。

實驗に於ける刺激概念の設定が內省を批判的に行ふ上に何よりも必要なことであるが、其と同時に實驗的內省を報告する言葉が話すものと聽くものとの間に

共通な意味を有するものでなければならぬ。吾々は相手の内省の報告を何の疑もなく其まゝに吾々の内省と同様に理解してゐるけれども、もし相手の言葉が自分の言葉と違つてゐる場合には、内省の報告を聽く前に先づ相手の言葉を正確に理解せねばならぬ。吾々の言葉は如何にして相互に共通の意味を理解せしめるやうになるか。此は刺激的條件が如何にして客觀的恒常性を保つてゐるかを認識するのと同様に、心理學的方法にとつては先決問題でなければならぬ。吾々は他國の人々と種々なる言葉を用ゐて話し合ふこともできる。子供の話す片言を理解することもできる。しかし斯る會話によつては吾々は日常生活の或る種の要求を滿足することはできるが、内省の確實性を認識するやうな心理學的要求を滿足することはできぬ。子供や狂人と心理學を語ることはできぬ。然らば心理學者の話す言葉は如何にして他の人々の言葉と區別されねばならぬか。茲に心理學者は刺激概念の恒常性を要求すると同様に言語意味の共通性を要求せねばならなくなる。如何にして吾々は共通なる言語の意味を理解することができるか。換言すれば如何にして言語的理解は可能であるか。此の問題は、如何にして

數學的認識は可能であるかの問題が自然科學者にとつての先決問題であるやうに、精神科學者にとつての先決問題でなければならぬ。此の問題は既にアリストテレスの περὶ ἑρμηνείας によつて提出されてゐる。しかし現代の所謂「解釋學」(Hermeneutik) は如何にして言語的理解は可能であるかの問題ではなく、寧ろ如何にして人間的理解は可能であるかの問題に飛躍してゐる。解釋學の問題は結局はそこに落付くべき問題ではあるが、其の前提として先づ言語批判の問題を取扱はねばならぬ。言語批判は單なる言語教育ではない。其は言語に表現される意味に共通的本質を認識せしむる方法である。數學が自然についての論理學であるとすれば言語批判は精神についての論理學である。論理學が言語批判其者ではなく、言語の論理學が言語批判である。吾々が內省を刺激概念と言語意味とによつて規定して表現することを自分は特に「批判的內省」と稱したいのである。故に批判的內省に於ては內省するものは自分の內省が規定されてゐる刺激についての充分の概念と內省が記述される言語についての充分の理解とを有してゐねばならぬ。斯る刺激概念と言語意味とを使用し得るためには內省者は特殊の教育を

受けねばならぬ。斯る教育が普通の內省者をして心理學的內省者即ち心理學者たらしむる方法である。故に批判的內省は心理學的內省或は心理學的方法といふことであつて、之によつて記述された心的存在は單なる箇々の心的存在ではなく其等の關係を明かにした心の一般的法則或は心理學の原理であつて、斯る一般的法則或は原理の確定は心理學者相互の批判的內省によつてのみ實現されるのである。實驗的內省或は組織的內省と稱するものは、斯る心理學の原理を批判する方法として使用することによつて其等の方法の妥當性が認められてくるのであつて、ティチナーの如く內省者を特に心理學者に選ぶといふことも意味を有することになる。しかし斯る場合には寧ろ自分と意見を異にする心理學者の內省を研究することが望ましいのである。

然らば子供や普通の人間や動物などを相手にして行ふ實驗は何を意味するのであるか。彼等からもし言葉によつて內省の報告が聽かれるとしても、斯る言語的表現は動物の叫聲や行動と同等に何物かの表現として解釋されねばならぬ。其の表現されたものが如何なる性質のものであるかは之を解釋する心理學者の

知識に俟たねばならぬ。心理學者の知識によつて解釋されない存在は單なる學問的仕事に對する素材であつて、まだ心的存在としての心理學的價値を顯はし得ないものである。故に斯る存在は心理學者の內省に於ける主語として述語されることによつて始めて心的存在としての學問的價値を確立することができるのである。動物や子供の心は單なる素材としては心的存在でも何でもない。其等の表現が心理學者によつて解釋されて始めて確實な心的存在となるのであるから、其等の表現は其自身に於ては決して心理學的述語として、取扱はれないのである。其等の主體となるべき內部經驗は、心理學者にとつては單なるModus obliquusに過ぎないので、たゞ心理學者が其等の表現によつて解釋した心的存在は心理學的主語として心理學的述語に對してはModus rectusとして表象されねばならぬ。斯る理由から吾々はゲーテを理解することによつてゲーテになることもできねば、又シーザーでなくともシーザーを理解することができるといふことを力强く主張することができるのである。玆に心理學の問題は嘗てジョン・スチャート・ミルが明瞭にしたやうにPsychologyとEthologyとの區別を再び認める必要に相遇するので

ある。ハーバート・スペンサーの如く心理學を主觀的心理學と客觀的心理學とに分けるにしても、ヴントの如く實驗心理學或は個人心理學と民族心理學とに分けるにしても、又はブレンターノが認めてゐるやうにDescriptive Psychologieは Genetische Psychologie と嚴密に區別しても、いづれも一方の存立を肯定して他方を否定すべきものでなく、寧ろ一方が他方の基礎となるべきものである。古くは經驗的心理學と合理的心理學とに於ても兩者の關係は決して排他的のものではない。ディルタイの如く記述心理學を說明心理學に對立せしめて精神科學の方法としては說明心理學的方法を認めないのは、彼の記述心理學には同時に發生的、個性的客觀的見地が採用されてゐるからで、此等の見地から考察する方法が飽くまでも說明的ではなく記述的でなければならぬからである。しかし自分は心理學の方法としては精神科學の基礎學となるべき記述心理學と其の特殊科學となるべき發生心理學とを方法上から區別することの妥當なるを認むるものである。此點については更に稿を改めて論ずる機會があらうと思ふ。（昭和三年四月八日）